

渡り「人」と「車」の未来

先月のハロウィン当日、私が住むランシングでは早くも雪が降りました。昨年は穏やかなハロウィンだったのですが、今年はしっかりと冷え込んできているようです。11月10日朝のランシングの気温は-7℃前後に達し、いよいよ厳しい冬が迫ってきました。道路には早速、融雪剤が撒かれ始めていますし、先月までは近所で走り回っていたリスたちも、冬期分の食料調達を早めに終えたのか、このところ鳴りを潜めているようです。

人間も次第に外へ出るのが億劫になってしまいそうですが、そこはしっかりと楽しいイベントが準備されていて、11月後半のサンクス・ギビングデーとそれに続くブラック・フライデー、それらが終われば、クリスマスに向けて飾りつけが始まり、街も人々の心も一段と明るくなるとともに、財布のひもが緩みがちになるのだとか。うまくできています。

一方で、渡り鳥のように、寒い地域を脱して、暖かな地域で冬を過ごす「渡り“人”」（俗に snowbird と呼ぶそうです）もいらっしゃるようで、知人の一人はフロリダ州に行っていると聞きました。しかも、鳥みたいに飛行機で飛んで行くんだと思ったら、車だと言います。いやいや、ミシガンからフロリダって、1000マイル（1600km）以上あるから、よほどドライブが好きな人なのかと思ったら、実はよくある話らしく、結構驚きました。試しにナビで検索してみたら、約17時間と表示されました。



この延々と続くハイウェイやフリーウェイのドライブ時間を少しでも快適に過ごすために、アメリカの人々が車に求めているモノやコトは、日本と少し違うように思います。キャンピングカーとまではいかずとも、車には広いスペースも含めて居住性が求められるとともに、ドライバーの負担軽減のために、アクセルを踏まずとも速度を一定に保つ「クルーズコントロール機能」が、多くのレンタカーについています。近頃ニュースでよく見かける「自動運転」が極めて積極的に研究されるのも少し分かる気がします。

ミシガン州では、以前から自動車産業が盛んなこともあって、自動運転を巡ってはミシガン大学をはじめ、各研究施設で熱心に取り組まれていますし、昨年末には、「無人運転車」の公道テストを認める法律が他州に先駆けて成立しました。一方、滋賀県内でも、この11月から東近江市内で自動運転バスの実証実験が始まっています。

誰もが安全で快適に移動できる手段として、今後「車」がどのような役割を担っていくのか、注目していきたいと思います。